

保育の実践（岡山県 第5分科会）

わたし・わたしたち・みんな

想像の世界 ひろがりつながっていく楽しさ・嬉しさを一緒に



2019年8月20日

学校法人 竹中学園

認定こども園 竹中幼稚園

第5分科会（岡山県）

保育実践：わたし・わたしたち・みんな（想像の世界 ひろがりつながっていく楽しさ・嬉しさを一緒に）

指導助言者：金山和彦 先生（倉敷市立短期大学保育学科 教授）

担 当 園：学校法人竹中学園 認定こども園竹中幼稚園

司 会 者：小田 敦美（認定こども園 竹中幼稚園 主任）

発 表 者：松本 智子（認定こども園 竹中幼稚園副園長）

〃 〃：秋山奈津乃（認定こども園 竹中幼稚園）

記 録 者：石原美由季（認定こども園 竹中幼稚園）



1、発表の概要

この実践は、本園から数メートルしか離れていない隣接地での2年間にわたる15階建ての高層マンション建設による決してよいとはいえない環境のなかで、子どもの「豊かな育ち」を願い「またあした！と笑顔で挨拶をしたい」という教師の思いと、子どもの「豊かな想像力」によって、マンション工事関係者をも巻き込んで、子どもも保護者も私たちがみんなで豊かな日々を創り出していった記録である。

同時に本園の教育目標の一つ「共に生きる」をこの実践のなかでどのように具現化していったかという実践記録でもある。

本園の教育の大きな柱である「共に生きる」は、「きみとぼくは“ちがう”」から始まる。思いの違いからおきる「トラブル」は「困ったね、〇ちゃんと△くんはちがったね。」「“ちがう”って難しいね。」であり、誰かと一緒にのほうが楽しい場面や、力を合わせて達成した喜びは「“ちがう”ってうれしいね。たのしいね」である。この“ちがう”をあたり前にすることが「違い（互い）を受け入れあい、認め合う」ことであり、そして、「違うからこそ、共に生きようとする」そんな力の土台を日々の保育のなかで育みたいと願っている。実践のテーマである「わたし・わたしたち・みんな」は、この“ちがう”を土台にし、その子らしさの表出を受け入れあい、大切にしたい、「みんなも主役・わたしも主役」という豊かな時間を過ごした「みんなの物語」である。

◎ 本園の行事の捉え方について

この物語では、「笑顔キラッとカーニバル」（作品展）の行事に向かうプロセスも描かれている。ここで、本園の大切にしている大きな3つの行事を紹介する。この3つの行事はどれもその目的は「大きくなった！このことを拍手と笑顔で喜びあう日」として位置付けている。一年を通して毎日の育ちは目には見えにくい、この3つの行事（通過点）でその成長をしっかりと確認しあい、喜び合う日である。今回の物語に描かれる「笑顔キラッとフェスティバル」（通称キラフェス）は、絵画や造形・音楽という「表し」（表現）活動を通して喜びあう日である。このキラフェス当日までに、子どもたちはどのような日々を過ごし、どのような当日を迎えたのか・・・ここから物語は始まる。

ものがたり①

「これ、“まほうのたね”なのよ」と、砂場のカップに入った“まほうのたね”を見せてくれたのは年長児の女の子。

1、 はじまり

サラ砂作りをした後の小石を集めたカップ。

“まほうのたね”と両手で差し出され、両手で受ける。

差し出した女兒は穏やかで満足げな表情。

“まほうのたね”の魔法にかかったように、近くにいる他児が寄ってきてとどんどん会話がはずむ。

教師は目の前の子どものワクワクした表情を見ながら、子どもと同じモノを見つめ、同じように感じ取りたい、そして仲間としてこの場にいることで共にこの世界を楽しみたいと思った。



それ、ただの“いし”じゃん！

そうだよ“いし”だよ。

でも、いまは“まほうのたね”なの！ねー！



“まほうのたね”
うえよう。

“まほうのたね”だから“まほういろのねっこ”

この一言で子どもの持つクレヨンの色とねっこの模様がカラフルに変わり、描く速度が上がった。「こうでなければ」という思いがはずれる。その時々「感じて」「あらわして」いく。“まほうのみ”の出現を聞きつけて集まる子どもたち、ジョウロに水を入れてくる子ども、それぞれのワクワク感が広がっていく。

教師は、「もっとこうすれば・・・こうなるかも・・・」という、こちらに引っ張り込みたくなる気持ちを抑えながら子どもの表情・言葉・目の輝きを手掛かりに、子どもの選ぶ判断を支えた。



“まほうのたね”だから“まほうのねっこ”なの

“まほうのねっこ”にはね、“しあわせのず”をあげるのよ

<教師のミーティング>

* “まほうのたね”からはじまった物語は、子どもたちの次から次への想像でとどんどん進む。子どものイメージを壊さないようにどうすればよいのか教師が追いついていかない状況もあった。しかし、この子たちの子の表情を大切にしたいという教師の思いはどの教師も同じ。子どものつぶやきや言葉をメモに残し、ミーティングで共有しながら次の展開への手掛かりを探っていった。

ものがたり②

“まほうのたね”は“しあわせのみず”をたくさん飲んで大きく大きく伸びた。ある日、一枚の手紙が園に。「わたしはシード。この“まほうのき”だれがうえたの?」「シード、みんなのことしりたいな」ここから、シードさんとの毎日がはじまった。

2、 つながるーシードさんとの出会いー

シードさんとの出会いに大騒ぎ

「みんなのことしりたいな」の言葉に答えて「教えてあげる」「ぼくたちもシードさんのことしりたい」の言葉。

“しりたい”ってことは、ともだちになりたいってことなんかなあ? ぼくだって、シードさんのことしりたいよ。

もしかして、もうまほうのみを食べたかなあ? どんな味かなあ? 次々に想像して楽しむ姿。

そして、「そうなんだね」「そうだね」と共感してくれる教師の存在により、これまでのそれぞれの経験を重ねながらさらにイメージが広がっていった。それぞれのシードさんとの出会いの場面で感じている思いは小さなつぶやきや表情・仕草によって表されていった。教師は「この子の眼差し」を感じたいと思った。



“みんなのこと しりたいな”ってことはさ
みんなと“ともだちになりたい”ってことなんじゃないかなあ。

「ぼくたちも“ともだち”になりたいよな。な!

たけなかようちえんのみんなのこと おしえてあげよう



教師は

「みんなのこと おしえてあげよう」の言葉を手掛りに、
次の活動へ・・・自己紹介のための自画像

<教師ミーティング>

*当初は子どものつぶやきや言葉をメモに残すことが精一杯だった教師も、「あの場所でこんなことが・・・」「あの子がこんな言葉を・・・」そんな、伝達が飛び交い「どこどこ?」とその場所に行き写真を撮ったり、そっと子どものやりとりをうれしそうに聞く姿に変わっていった。

*この頃のミーティングでは、子どもの声を聞く、思いをしっかり受けとめる。「子どもとともに」何度もミーティングで聞こえてきた言葉。きっと、おまじないのように自分に言い聞かせていたのであろう。

“わたしは子どもにはもどれない”と思った。だから、子どもからしっかり学びたい。ミーティング中の教師の言葉。

そして、今年度の「想像の翼を広げて」のテーマを「シードさん」に決定した。

ものがたり③

「みんなのこと知りたいな」とのシードさんからの手紙。自分の顔を描いてシードさんに届けることに。

3、ひろがる・ふかまる

1、(わたし・ぼくの活動) 自画像

*「わたしのこともっとしてもらいたい」

“だいすき”になれば誰でも抱く思いをそのまま活動にした。「わあ、このなかに わたしがいる」「ほんとに目が2つある」教師は、かがみのなかの“わたし”を見つける時間をたっぷりと確保した。

「シードさん見つけてくれるかな」「わたしは笑うとかわいいってわかったの。だからこって顔を描いたの」たっぷり、「わたし」を見つめた子どもは、シードさんへと意識が向く。

クレヨンで描きながらつぶやく。鏡で見る自分に驚きやいくつもの発見は「わたしとシードさん」との対話にも見える。その対話は教師の共感によりさらに深まっていくように感じる。

わあ、かがみのなかに わたしがいる



“わたしはね、かわいいところをおしえてあげたの”



教師は

それぞれの心の中にある「シードさんへの思い」の伝えあいをするこ
とで、「わたしたちのシードさん」への意識へと広げていった。

<教師ミーティング>

シードさんが“だいすき”な気持ちから生まれてくる絵や歌。そしてつぶやく。自分の生活とファンタジーが結びつき
その子の世界が描かれていく。

「子どもの問いやつぶやくにどう答えてよいかわからない」と悩んでいた教師も、子どもの問いかけに答えるのではなく、
子どもと一緒に楽しみ、答えを探すプロセスを楽しむこと、そして子どもの「今」していることに意味を見出していきたいと
思うようになった。

ミーティングでは、それぞれの子どもの「わたし・ぼく」の絵を一枚ずつ見る。子どものつぶやくきをメモを見なくても、
それぞれのつぶやくきを覚えて楽しそうに報告できるのは、きっと、子どもの言葉に心を傾け、その時その子の世界にともに
いたのだから。

ものがたり④

シードさんがたいへん！ 「おうちをつくっているときに、あしをけがしちゃったよ。」
ぼくたちがおうちをかわりにつくるよ。シードさんのあしがなったら、みんなでおいわいのパーティーしよう！



3、ひろがる・ふかまる

2、(わたしたち・ぼくたちの活動)

* (年少) シードさんのうたづくり

シードさんのイメージを伝え合い、「ことば」つないでお話づくり。「ことば」に色をつけたり、曲をつけてうたづくり。

わたしのシードさんのイメージの伝えあい「ふわふわのくも」
「にじのはしわたってるのよ」「らんらんてうたうのよ」伝えてくる表情はまるでシードさんと一緒にその世界で遊んでいるかのようにであった。そして、言葉と同時に「らんらん」と歌いながら歩いたり、跳ねたり、身体の表現とつながっていった。「わたしのシードさん」を、みんなで聞くことで、ふわふわのくもに虹がかかって、そこをらんらんて歌うシードさんがいる・・・そんなストーリーが出来上がった。教師は、その子どもの世界を知りたいと願い、声を聞き、表情を見ながら共に楽しんだ。

* (年中)

“まほうのき”になる“まほうのみ”づくり。みんなが植えた“まほうのき”ってこんなかんじ。

” *シードさんの庭に届いた木を描く。模造紙に“わたし”“ぼく”の思いで、自分の場所を確保し描き出していく。
教師の“シードさんのき”って、どんなきなんだろう？の言葉によって、「わたしの描くき」から「シードさんのためのき」へと意識が変わっていった。そして、それぞれの場所で描きながら、「つないでいこう」「ここにこれを描こう」と加えていく。時に、用紙から離れて絵を見ながら、それぞれの場所で描いたモノをつなげていく。「ここはわたしの場所」がなくなり、一つの木として共有されていった。



教師は

「わたしのシードさんの“まほうのき”は
“シードさんのき”って、どんな木なんだろうね」と教師の言葉と表情によって「あっシードさんのきだったんだ！」と、「わたしたちのシードさんのき」への意識へ広がっていった。

* (年長)

シードさんのおうちとお庭づくり (ぼくたち、ひかりけんせつ! みなみさん てつだってくれる?)

工事関係者に協力を依頼し、子どもと工事現場視察。
安全第一・ 社名の旗、工事中の看板や道具・・・園に
帰ると早速「旗づくり」と「シードさんの家づくり」
のチームに分かれて作業開始。

一つの目的をもち、喜んでもらいたいという願いや
イメージを共有することは、自分たちで話し合い・仕
事を分担しながら協同で作り上げようとする、より主
体的な姿につながった。

自分とは違う友だちの思いを受け入れ、目的を達成す
るために、何度も意見のぶつかり合いをしながら、そし
て折り合 いをつける生活は、「おうちをつくるのはぼ
くたち」の意識が高まっていき、そのことは、新たな
意味や新たな嬉しいの広がり生まれることを実感
しているようであった。



みなみさ〜ん てつだって〜。 あのね、くぎをうつむすかしいんだよ



教師は

子どもの思いを受け止めながら、作り手の仲間として意見を
言ったり、協力したり、「ここをこうしたい!」という要
求の実現のためにそっとサポートした。

子どものペースに
合わせてたら
キラフェスに
間に合わない。

という焦り。



<教師のミーティング>

この頃になると、教師はキラフェスに向かい、子どもの絵画・製作の「展示方法」「急がないと」へ意識も強くなっていた。
それぞれの子どもの思いを大切にしたい。しかし、「シードさん おめでとうのパーティー」開催日が近づき、「間に合わないか
もしれない」焦る気持ちが強くなっていく。

わたしたちは、この「作品展」で何を保護者に伝えたいのか。子どもの表情やつぶやき、豊かな感性や友だちとのコミュニケー
ションなど、こんなに生き生きと誇らしげに活動している「この姿」こそが、大きくなった証。

製作や絵画に添えられた子どもの「ことば」を大切にしてほしい。製作のプロセス、作品の背景にある意味と子どもたちの学び
を見てほしい。「わたし・わたしたち・みんな」の世界を行ったり来たりしながら、毎日大きくなっていく子どもたちの成長をみ
んなで喜び合う、そんな「作品展」の1日をつくることを確認しあった。そして、期限までに製作や展示を教師側の都合で間に
合わせる活動はしない。このことを決定した。「期限までに、よりも“今の姿”」このことは教師の「子どもとともに」への意
識に引き戻すこととなった。

4、遊び込む おめでとうのパーティー

1、シードさ～ん!

シードさ～ん!
おめでとう!

・やった

登園してきた同じチームの友だちと早速打ち合わせ。これからはじまるパーティーへの期待とワクワクドキドキ感が伝わってくる。「よし!! やるぞ、できる!」といった「意欲」は、「ぼくたちで創った」という満足感と、「みんな!がんばるぞ」と思いを一つにする喜びを感じあえる「仲間」の存在が大きいのだろう。

たくさんのお客様を招いてのパーティー。シードさんが来たら座るイスも準備完了。どの場所でも、子どもたちは「ぼく・わたし」の思いを自分のもっている「語彙」を駆使して説明する子どもたち。そして、「みんなで“シードさんがよろこんでくれるように”につくったんよ。」の言葉に腰をかがめて「そうなの」と笑顔で応える保護者。保護者のまんなかに子ども。

たくさん笑顔と拍手で一日を終えた。この、笑顔と拍手そして子どもたちのやりきった満足感や達成感であふれる表情。この光景が子どもたちの心にあたたかい思い出として積み重ねる勇気や元気になると信じている。

5、未来へ

あ～おわっちゃったあ
たのしすぎてつかれた～



“まほうのたね”との出会いが7月。「シードさんおめでとう」のパーティーが11月。この期間、子どもたちは「シードさん」と一緒に毎日を過ごした。決して目に見えないことのできないシードさん。「だいすき」という気持ちを基とした言葉・絵・音楽等による表現、また、個のイメージが次々に共有され新たな世界へとつながり広がっていく様子は、教師の「こうすれば、きっとこうなるだろう」という予想を遥かに超えた。

「わたしとシードさん」の対話から始まり（イメージ）、「わたしたちの」「みんなの」とつながっていくが、その中にも「その子らしさ」がひかり、まさに「みんなのなかのわたし」が主役である。

本園の実践している「想像の翼を広げて」の活動。社会人になっている卒園生が園を訪ねてきた際の言葉。

「せんせい、幼稚園のころパワーストーンしたよね。あれ、先生が全部してたんでしょ。実は、途中からわかってたんよ。今思い出しても笑えるわ」そして、その当時の友だちとどんな話をしたのか、実は少し怖かった話、そして机の中にまだ当時見つけた「パワーストーン」を大切にしまっておくことを教えてくれた。また、小学生になった卒園生は秋になると「せんせい、今年はだれが幼稚園に遊びにくるの?」とやさしい表情で尋ねる。「ぜんぶわかってるよ、妹には言わないから」と笑いながら帰っていく。子どもたちの心のポケットに入ったままなのだ嬉しくなる。今年もまた子どもたちに「想像の翼」にのせてもらい、わたしたちもその世界をしっかりと楽しみたいと思う。

ii、質疑応答（付箋を使って）

実践報告終了後 30分の休憩を兼ねて「シードさんのまいにち」のパネル（後方展示）を紹介
閲覧の後、3枚の付箋に参加者が「感想」「質問」を記入し、掲示板に貼り付けた。

休憩時間終了後、付箋に基づいて質疑応答がなされた。

<感想>

- とにかくワクワクしながら、自分も仲間の一員になったような感覚でお話を聞かせていただきました。先生たちが日々、子どもたちと“楽しい”を作り出していくことを思い、チーム全体のスキルの高さを感じました。大人になってもずっと心に残るすばらしい想像の世界です。
- 「たのしいをこわすひとは こないてください」と、子どもから出た言葉に、自分たちで「たのしい」を作る心情が強く表れていると感じました。「たのしいパーティーだから きてください」 すごいです。
- マンション工事（負）を（有）に考え、子どもたちの実態を考慮し実践されたことが発表のいたるところから感じられました。特に“作品展”に間に合わなくても良い”と決断された勇気に大拍手です。

<質問>

Q、一連の活動中、興味のない子どもはいなかったのか？全員が同じ方向をいつも向いていたのですか？

A、本園は「ちがう」ということを土台にしています。年齢も個々の発達もちがう子どもたちなので、「みんなが同じ方向を向く」という意識はありません。「みんなと一緒に活動」中でも、なんだかわかんないけど、みんなが嬉しそうだから、なんだか嬉しくなって笑っている人、みんなの話している内容は理解できないけど一緒に「は〜い！」と返事をする人、その小さい人たちを見ながら大きい人たちが笑っている。かつては自分たちもそうであったことをちゃんと覚えている。

「わたしの活動」の場面でもシードさんのことより、鏡の自分をみて驚きながらいろんな表情をして楽しんでいる人、変顔をして笑いあっている人もします。

それぞれですし、それぞれでよいと思っています。「シードさんの世界」という広い大きな世界のなかで「わたし」が楽しみ、「わたしたち」であることを喜びあう・・・そんな豊かな日々を過ごしたいと思っています。

Q、先生たちのミーティングは毎日、どのくらいの時間でどのようにされているのでしょうか？

A、本園では、保育時間が終わるとミーティングルームに帰っていた教師から、ホワイトボードに今日の振り返りを記入します。（付箋の場合も）「できなかったこと」ではなく、「今日成功したこと」「わたしががんばったこと」「困ったこと」を中心に書き入れ、みんなが視える「視える化」をしています。このことは、教師自身が他教師の思いやスキルを取り入れ“わたし”を広げるよい学びになっているようです。

Ⅲ、 指導助言

いろいろな質問をありがとうございます。皆さんこの分科会に参加して下さりありがとうございます。

子どもたちは、豊かな安定した日々を過ごすためには心の栄養をたくさん与えるこの仕事がとても大切だと思います。

竹中幼稚園とは2年間のおつきあいになります。その間、先生方とたくさん話をしました

子どもたちは毎日の生活のなかで、自分の思いやイメージを言葉にし、出し合いながら感性を磨いているそんな生活がここにあるような気がします。日頃の先生と子ども、子どもと子どもの心の手触り、肌触りといったものを大切にする保育をしてくれているのではないかと思うのです。

さて、先ほどの実践発表、このプロジェクトで、何が一番伝えなかったのか・・・テーマにあるように「自分的なシードさん」から抜け出して「ぼくらの」「みんなの」シードさんに向かう、これも大きいと思いますが、やはり、「シードさん」を使って隣接地のマンション建設という園の危機を乗り越えていく、困難なものを取り込んで、巻き込んで、想像の世界の中でこの状況のなかで起きてくる問題を解決し、そして子どもの心に栄養を与えていく、まさにマイナスなものをプラスに変えていく保育、このことが最高の答えではないかと思はれるのです。

実像のない「シードさん」のような想像的な活動が、子どもの心の栄養になっていく、先ほどの報告にあったように、「なんか、思い出すと笑えるんよ」という社会人になった彼女の言葉にあるように“大人になっても懐かしめる”、そしてそのことが生きる上での糧のようなものになっている、このことに証明されているように思えます。

さて、この「シードさん」の活動は一年間に及んでいますが、その間の先生方のモチベーションを保ち続けるマジック、そのマジックの答えがさきほどの実践報告にあった「教師のミーティング」の中にあるのだろーと思はれます。「次はこうしよう」「明日はここまで」といったものではなく、子どもの言葉や表情を手掛かりに「ふんわりと」「ほのめかす」ような「しかけ」をつくっていったと思はれます。そこに子どもがどう反応し、次にどんな言葉をつぶやき、どのようにそれぞれの子どもが表現していくのか、そして、またミーティングを重ねる。ハイレベルな集団だなあと思はれます。

ここで一つ園長先生と話をしている竹中の教育だなあと思わされたエピソードをご紹介します。

園庭の真ん中に砂場の赤いバケツが転がっていて、その中には「小さい組の人たちが作った“小さな団子”」それも、形の崩れた団子がありました。そこへ年長児がやってきて園庭で遊び始めます。庭の真ん中であつたので、自分たちが遊ぶにはきつと邪魔だつたと思はれますが、その赤いバケツを手にとつて中にある“小さな団子”を確認すると、そつとバケツを返し、そのままにして、自分たちは上手に避けて遊んだという話でした。なんてことのない日常の場面に思はれますが、ここに竹中教育があると思わされました。「ああ、これは小さい人たちがつくつたものだ」「ぼくたちには、なんてことのない団子だけど、この団子を作つた人はきつと大切にしてくるんだなあ」と思いを馳せている、これはとてもハイセンスな保育だと思はれるのです。この話は、私は家に帰つて家族にも話しました。「自分」「たち」「みんな」への育ちが見えます。

話を戻します。「想像の世界」は現実と向こうの世界。この2つの世界を行つたり来つたりしながら楽しむ、この2つの世界の「すきま」を上手に作り上げていっているなあと思わされます。

この竹中の保育を「プロジェクト保育」とは言いたくない気がします。プロジェクト保育といへば、何か一つに焦点をあて深く探究していくというイメージがありますが、竹中の場合は、もっともっと柔軟にその時の空間・空間で言葉を交わしながら、進んだり引き戻されたり、「プロジェクト保育」というよりはゆるやかななかに「オーラルヒストリー」的な、想像の世界のなかでの怖さ・不気味さ・ワクワク感・ピンと頭のなかでライトが光るといったチャンス保育的な、いろんなものが含まれたとてもセンスのある保育なのではないかと思はれます。

園の危機を「想像」という力で乗り越え、子どもの心に栄養を与え、大人になる子どもたちの心に積まれ、生きる糧となつていくのだということをお話して終わりたいと思はれます。

Ⅳ おわりに

今回、本園の毎年実践している「想像の翼を広げて」の取り組みを発表するにあたり、4年前の私たちの実践をまとめ、整理し、再考することができたことに心から感謝している。毎年、取り組むこの活動では、保護者向けにドキュメンテーションを作成し展示している。子どもの育ち・本園の考える表現とは何か、そして教育目標である「共に生きる」をどのように日々のなかで具現化してきたかを、ドキュメンテーションとともに「笑顔キラッとフェスティバル(作品展)」当日の、参加者全員で楽しむためのパーティ(学年ごとに行われるごっこ遊びや音楽コンサート等)の中での子ども同士のかかわり等を通して理解していただく日として位置付けている。

このたびの実践は4年前の実践である。4年を経て私たちは、この実践記録を再度読み返し振り返ると、4年前には見えていなかったこと、足りていなかったこと、反対に、現在よりも手間暇をかけて丁寧に子どもに寄り添おうとしている教師の姿が見えてきた。また、助言者の先生のアドバイスやそっとなげかけられる問いかけにハッとさせられることもたくさんあった。このことは、日々の保育実践に夢中で取り組み、整理できないままになっている私たちにとって「軸はここですよ」と引き戻され、「大切にしたいこと」を確認しあう姿へとつながり、明日からの保育に生かされていった。この実践発表を通して、たくさんの学びをいただいたように思う。

今年も、子どもも大人も「想像の翼」をぐんと広げながら、そして、子どもの育ち・大人の育ちを喜び合う日々をつくっていきたいと思う。

引用参考文献

磯部錦司・福田泰雅(2015)「保育のなかのアート」 小学館